このひとの東京 ▷26◁

ピアニスト 兵頭 佐和子さん

駆け出し時代の支え

路地に小料理屋の明かりが漏れ、花街だった面影を残す新宿区荒木町。最近は新しい店もできて、若い人の姿が増えた。ジャズピアニストの兵頭佐和子さんも、演奏帰りにここでグラスを傾けるのが好きだ。

クラシックピアノを学んだが大学時代からジャズにのめり込み、演奏家になろうと決意。二十六歳のときに、荒木町近くのアパートで一人暮らしを始めた。グランドピアノは置けず、アップライトをクレーンでつるして部屋に入れた。古い二階建ては、車が通るとよく揺れたが「思い切りジャズができるって思ってワクワクしました」。

道は険しかった。仕事が入っても思うように弾けず、客から「へたくそ！」とヤジが飛び、ベテランプレーヤーには「人間が良くないから演奏も良くないんだ」と言われた。アパートに帰って一人で泣き、またけん盤に向かった。

そんな駆け出し時代から応援してくれたのが荒木町の友人たち。路地にあるバー「Deep」のマスターは「演奏が好きで聞きに行っただけだよ」と言うが、仕事も紹介してくれた。ジャズが流れる店はOLらでいっぱいだ。初対面同士でもサッカーの話題で盛り上がってしまうスタンディング・バー「イパネマ」や、店内に仏像がある「坊主バー」にも友人がいる。

ジャズスポットからひんぱんに声がかかるようになった今も、演奏に満足することはない。「でもジャズを弾いているときは幸せ。言葉にならないところで、バンドとお客さんとの心が一つになる空間をつくりたいって思うんです」。荒木町は、ひたむきな思いを胸に走りだした大事な出発点だ。

ジャズが流れる中、マスターとのおしゃべりも楽しい小さなバー「Deep」＝東京都新宿区

ひょうどう・さわこ　74年愛知県生まれ。武蔵野音大ピアノ科、東京学芸大大学院修了。ブルース・バース氏らに師事。新宿「J」やホテルなどで幅広く演奏活動中。

@tokyo

ビル屋上に自然空間

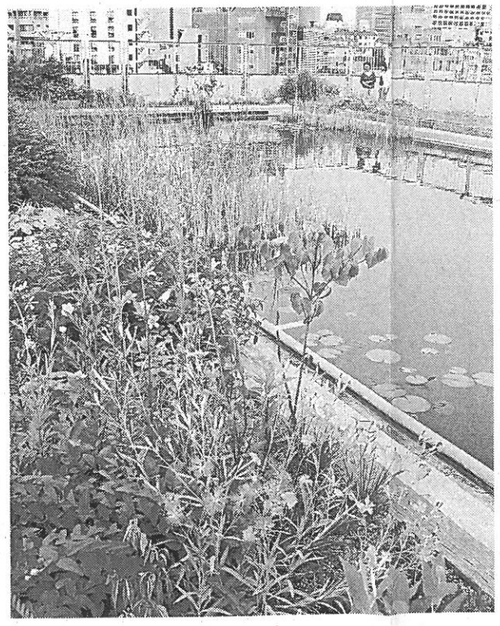
ビオトープや10万匹養蜂も

東京のビル屋上に、自然が増えている。生き物が暮らす環境を再現したビオトープや庭園が廃校やデパートに作られ、銀座の真ん中で今春から養蜂も始まった。

廃校となった渋谷区の旧原宿中学校の屋上。かつての二十五㍍プールはハスがつぼみをつけ、ヨシやガマの茂るビオトープに生まれ変わっている。プール隣の元バスケットコートは一般の人が使用できる菜園で、ナスやトマト、枝豆などが育つ。手入れにきた主婦、飯塚広美さん(50)は「土や緑に触れるのは気持ちがいい。夏の夜はホタルがきれいですよ」と話す。取れたての野菜を使った献立は家族にも大好評だ。

品川や渋谷の区庁舎屋上も緑化され、デパートにも屋上庭園が増えている。昨年開園した日本橋高島屋のほか、新宿の伊勢丹本店でも六月、屋上庭園「アイ・ガーデン」がオープン。約二千平方㍍の回遊庭園にはキンカンやアジサイなど約二百種類が植えられ、チョウが舞う。妻の買い物を待っていた世田谷区の無職男性(68)は「こういう空間がもっと増えるといい。癒やされるね」。

銀座三丁目の紙パルプ会館ではこの春、屋上で約十万匹のミツバチが飼育された。街路樹や浜離宮、皇居のソメイヨシノやユリノキなどから百五十キロ以上のみつが採れた。「養蜂で樹木が受粉して実がなり、小鳥が来るなど、街で生態系に気付くようになった」と銀座ミツバチプロジェクト世話人の田中淳夫さん(48)。花の香りが漂う「銀座ハチミツ」は、洋菓子に使われて松屋銀座などで販売されるブランドになった。田中さんは「都会で長い間排除されていた自然が、今や新たな価値を生んでいますね」と話している。



ビオトープになっている旧原宿中学校の屋上プール。周りはビルだが、ここはのんびりした雰囲気だ＝東京都渋谷区

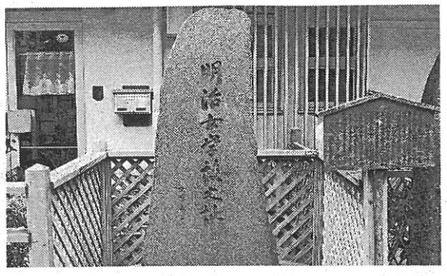
東京点景

歴史スポット

明治女学校跡

豊島区西巣鴨２丁目には、明治女学校跡の碑がある＝写真。明治女学校は1885（明治18）年、キリスト教を信仰する木村熊二、鐙子夫妻が発起人となり、田口卯吉、植村正久らが賛同して創設。日本人による初のキリスト教主義の女学校として知られる。

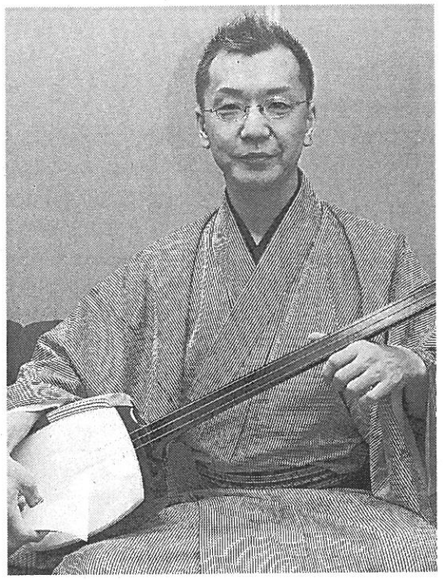
もともとは飯田橋の旗本屋敷に開校されたが、火災で校舎が焼失したため、1897（明治30）年に巣鴨に移転した。教授陣には、島崎藤村、北村透谷らがおり、自由学園を創設した羽仁もと子、新宿中村屋創業者の相馬黒光らを輩出。1908（明治41）年に廃校となった。



関東甲信越ネット

がんばってます

出演の一回一回が勝負



「三味線を身近に聴けるものにしたい」と話す紫文さん

音曲師

柳家　紫文さん（48）

（高崎市出身）

二〇〇五年度の国立演芸場花形演芸大賞の銀賞を獲得し、六月下旬に表彰された。三味線を弾きながら都々逸や漫談を披露しており、上野鈴本、浅草演芸ホール、池袋演芸場といった都内の寄席で引っ張りだこの存在だ。

十七、八歳ごろから、母親が使っていた三味線をギター代わりにベンチャーズなどを弾いていた。「日本人には三味線の方が合う」と気付いたという。

二十一歳で上京後、アルバイトの一方で小唄のけいこを本格的に始め、三味線の腕をめきめき上げた。その後、常磐津を学んで歌舞伎座にも出演、「日本の音ってすばらしい」と実感した。

三十代後半で音曲の名人である柳家紫朝さんに弟子入り。早速、三味線を弾くと、「『だめだ。弾いている顔が怖い』と注意された」と笑う。

「お客さんが笑ってくれたときが最高の瞬間」。寄席に立って間もなく十年を迎えるが、出演一回一回を勝負と表現する。

「見に来てくれる人は、人生の大切な時間を割いてくれているから」

モットーは「なるようにしかならない」だが、ネタを四六時中考え、思い付いたものを電子手帳に保存しておく努力も欠かさない。

みどり市にあるながめ余興場にも積極的に出演。「演芸に特化した施設になってほしいので行政も力を貸してもらいたい」と訴える。（東京都杉並区）

やなぎや・しもん　高崎高卒。社団法人落語協会所属。2005年度国立演芸場花形演芸大賞の銀賞を受賞。